

現場を想う。



城山川

南多摩西部建設事務所
管理課長

鈴木 亜希子

これまでの経歴：

平成6年度入都。水道局を経て、平成11年度から建設局。道路建設部、総務部、第一建設事務所等を経て、平成24年度より南多摩西部建設事務所用地課用地担当係長。城山川の現場は平成27年度に担当。その後、北多摩北部建設事務所、西多摩建設事務所等を経て、令和4年度より現職。



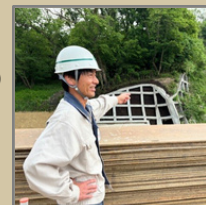
南多摩西部建設事務所

工事課 統括課長代理（河川設計総括担当）

齋藤 敦

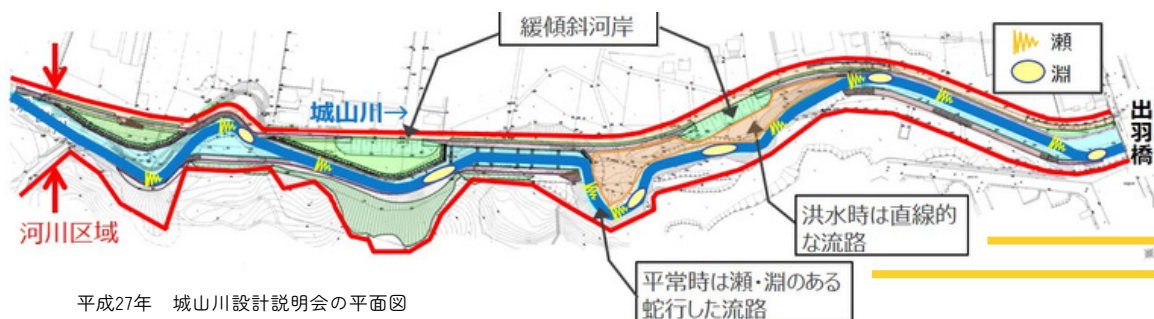
これまでの経歴：

平成元年度第七建設事務所に入都。第三建設事務所、多摩都市整備本部、河川部、北多摩北部建設事務所を経て、平成22年度から南多摩西部建設事務所にて城山川の維持・設計を担当。平成28年度に再び河川部に異動し、令和4年度より現職。



今月の現場：城山川

城山川は、八王子にある標高446メートルの八王子城山の八王子城跡付近に源を発し、御霊谷川、大沢川を合わせながら北東に流下し、八王子市叶谷町先で浅川に注ぐ全長約7kmの一級河川。大雨による水害発生が懸念され、平成25年に出羽橋上流から530メートル区間（下図）について都市計画事業の認可を受け整備を開始した。令和6年夏の完成を間近に住民の期待も高まっている。



平成27年 城山川設計説明会の平面図



用地担当の視点から

鈴木 亜希子 平成27年度に現場を担当

洪水対策で住民からも熱望された河川整備

都の中小河川整備は、1時間あたり50ミリの降雨までは河道、50ミリ以上の降雨分は調節池等に対応することとし、洪水を安全に流すための河道整備を、都内46河川、324kmで進めています。

この城山川も、平成20年8月の豪雨の際に沿岸の崖が崩れるなど水害の危険性を感じる状況となり、整備に対して住民からの積極的な要望があったことから、川幅を広げたり、河床を掘り下げるなどの河道整備に着手しました。一方で、具体的に事業を進める上では、都市計画決定時から幾分川の流れが変わっていることもあり、境界線の確定など、自然公物の河川ならではの苦労もあったと聞いています。



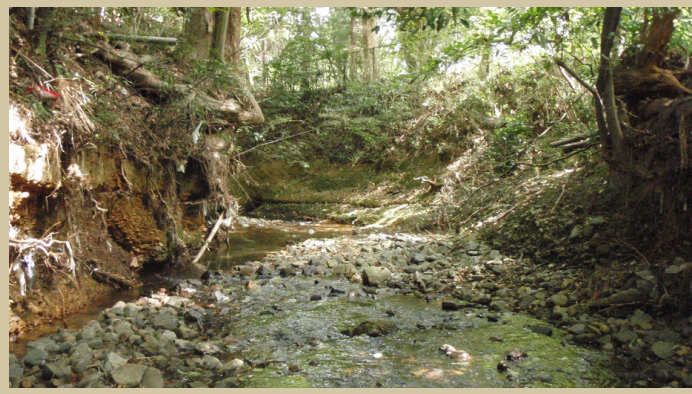
平成20年8月豪雨の崖崩れによる倒木
※整備前

河川ならではの用地折衝

この地域は、昔から住んでいる方が多く、改修工事で河川がどのように整備されるか、ということに関心が高い住民の方が多くいらっしゃいました。蛭や川魚の住む、稀有な自然環境を守りたいという声も多く聞かれたため、工事担当と連携して、整備後のイメージをお伝えすることを大切にしていました。

他方、自然に囲まれた地域ならではの、前任者も私も、用地取得の対象箇所を示すために道なき木々の中をひたすら歩き回ったこともありました。また、「河川管理用通路（※1）を車両が通れる道路にしてほしい」など、河川特有の要望もあり、きめ細やかな個別対応が求められました。折衝を通じて地元の方と丁寧に話をしていたことが、後に工事用車両の搬入路として土地をお貸しいただくことにも繋がったと聞いた時には、「対話」や「信頼関係」の重要性を感じさせられました。

※1 河川管理用通路は一般車両の通行不可



洪水による河岸侵食や河床低下が進行し、倒木の危険性も
※整備前

管理を見据えた整備の大切さ

用地担当として折衝をしている時は、用地取得から整備完了までの時間をとても長く感じます。でも、長い時間軸で考えると、用地取得・整備工事の時間よりも、完成後の時間のほうが圧倒的に長くなります。今、管理する立場で現場に携わるようになって、そのことを改めて考えさせられます。一度整備が完了すると、日々のメンテナンスとしての補修工事はあっても、大幅な改修工事は行われません。そういった意味では、最初の整備計画の時点から、事業完了後の使われ方のイメージをもって計画・用地取得をするなど、川の自然作用を見据えた細かい配慮も必要なのだと実感します。

先日、久しぶりに現地に足を運んだところ、鳥のさえずりが聞こえ、川のせせらぎが日差しに反射してキラキラしていました。水辺に近づくために、新しく整備された石段を下りていくと、水面より少し高い位置にあるオープンスペースは、広く、開放感にあふれていて、夏場に子どもたちが川辺で遊ぶ様子が自然と目に浮かんできました。うっそうとした木々や竹林の面影はなく、明るく爽やかな雰囲気に包まれた現場を見て、代々の担当者の努力と想いが集結しているような気がして、とても感慨深い気持ちになりました。



崖崩れ対策として法面整備実施後は園児の散歩コースに
※整備後



川のほとりではサギやカモも見かけるように



整備担当の視点から

齋藤 敦

平成22年度～平成24年度（維持管理）

平成25年度～平成27年度、令和4年度～令和6年度（設計）にて現場を担当

環境に配慮した設計

城山川での最初の仕事は、川の状況調査で、胴長を履いて臨みましたが、深みにはまってびしょ濡れになり、城山川の自然を肌で感じました。環境調査の結果、蛍が100匹以上、カジカ、ホトケドジョウなど、環境が良好な川にしか生息していない生き物が多数確認されました。私は子どもの頃、地元の新潟で蛍を見て川遊びをしていたこともあり、この地域の子供達にも城山川の蛍の記憶を残したいと強く感じました。そこで、永年城山川が築いた川の営みによる良好な環境機能と治水機能を両立した川づくりを果たすため、都市計画通りの直線的な河道整備ではなく、自然な蛇行と河畔林を可能な限り保全する河道計画を検討し、地元説明会で丁寧に説明しました。地元の方々の想いも伝わってきて、地域固有の財産である川を整備する責任を痛感すると同時に、期待に応える川づくりへのモチベーションが大きく上がったことを懐かしく思い出します。



河川管理用通路を片側のみとし、河畔林や自然環境を保全

地元住民や専門家との対話を大切に

環境調査を経て、専門家からも蛍の生息に関する知見を頂き、どうすれば蛍が乱舞する生態系を維持できるか検討を重ねました。その結果、護岸のブロックは、溶岩が埋め込まれた苔の生えるブロックを使うことにしました。蛍は、護岸の苔に産卵するため、苔は蛍の生息環境にとって非常に重要なのです。現在既に整備済みの箇所では蛍が復元し、住民の方から、蛍が手に取れるほど乱舞していたという話を聞いてとても嬉しく思いました。これも住民の方々が、継続して蛍を増やすための環境づくりに励んで頂けたからこそその成果ですし、十分に整備内容などを理解してもらえようという説明や対話を行ったことが、良い河川環境を保ち、再生していくための、地元からの協力にも繋がったと実感しています。



護岸には蛍の生育に配慮したブロックを使用



現場視察風景

自然と共生する川づくりの醍醐味

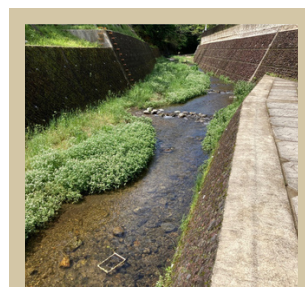
城山川をはじめ、特に多摩地域の河川整備の特徴は、いかにして自然との調和を保ちながら、洪水による被害を発生させない安全な川にしていくかという点にあります。大雨の際に増水しても、蛇行した流れが復元できるように河床や河岸の構造に細工を施すなど、設計担当としては工夫のしがいがあります。また現場では、河床の安定化を図るための堰に魚が自由に行き来できる魚道を整備し、上下流の連続性を確保する整備を進めています。工事中に、イノシシと遭遇する体験をしたのですが、「この豊かな自然を守ってくれよ」と訴えられた気がしました。今ある自然環境は、その川の自然の営みと人々とのふれあいによって成り立っています。貴重な環境の保全と洪水対策のための整備という相反する機能を両立させるには、十分に環境を理解して再生方法を検討しなくてはなりません。難題が立ちばだかることもありますが、そんな中で環境と調和した川づくりをすることこそが、この仕事の醍醐味だと感じています。



ゲンジボタルの一生



発光する城山川産の蛍



住民により水中に設置された蛍の幼虫の弁当箱（レシピは野菜の詰め合わせ）



現場では河床にある1.5mの段差を0.5mずつ3段に分けた堰を整備中（お魚が自由に通れる道も付加）

Before→After

城山川の整備前と現在の状況



Before : 2009(平成21)年9月撮影



After : 2024(令和6)年5月撮影

左の写真は整備前の城山川。左岸は河岸崩壊や浸食、右岸は河道内まで樹木が生い茂っていました。整備においては、右岸の自然は可能な限り保全し、護岸には苔を生やして環境を整備し、良好な景観も創出されました。左岸の河川管理用通路は整備中ですが、右岸から新緑の香りがかぐわしく、鳥のさえずりやせせらぎの音が聞こえ、開通を待ち望む住民の声も多く聞こえてきます。

取材を終えてひとこと

用地担当として仕事をしたのは南西建での4年間ですが、改めて振り返ると、色々な経験をさせていただきました（その後の仕事や私生活にも活かされています）。

ところで、用地業務にかかわらず、仕事をしていると、困難なことに遭遇すると思います。でも、「万事塞翁が馬」。どんなに大変なことも解決する（終わる）ときが来ます。できること、すべきことを、周囲の方々と協力しながら積み重ねていけば「明けない夜はない」はず。そう思って、日々取り組んでいます。

※写真は、用地時代に一緒に仕事をしていた米田代理と。今は用地課の要、調整担当をされています。

鈴木 亜希子（写真右）



少しは多摩河川における川づくりの魅力を伝えられたら良かったなあ、と思っておりまます。思えば、子どもの頃から自然が好きでした。城山川を通して地域の方々と触れ合うと、皆さんも自然への愛情に溢れ、蛍の幼虫への餌やりなど生物を増やす活動に取り組んで頂いて、自然と共生しながら生活を楽しんでおられます。そんな環境で仕事をできることにとてもやりがいを感じています。自然が好き、地域と一体になって、地域の財産である「川」を次世代につないでいく川づくりをやりがいに感じる人は、ぜひ、南西建の扉をたたいてください。

齋藤 敦



令和6年5月現在の整備現場

広報担当より



「自然の営みを活かしながら、治水と環境を両立することこそが川づくり。」「対話を通して理解し合える」「長い時間軸の中で整備と管理を意識する。」そんなお話を伺いながら、一人ひとりが、所属を超えて協力して丁寧な仕事を続けておられる姿勢が、地域の方々から喜ばれる形となって残っていくのだなと感銘を受けました。（新村）



八王子の豊かな自然にとっても癒された取材でした。ぜひ皆さんも音声ファイルを聞いて癒されてください！（大場）



地域との協力で蛍が昔のように見れるようになったお話。私も昔、蛍を見たことを思い出しました。自然との共存を継続させるのは大変な面もありつつ、やりがいのあるお仕事だと感じました。#蛍は一生残る思い出（干川）



TOPICS 他にもある！「南多摩西部建設事務所管轄の川」



注目の現場！！



案内川（高尾山口駅前）

案内川防災工事



2019年（令和元年）整備前



2023年（令和5年）整備後

高尾山口周辺のまちづくりと連携したにぎわい創出

昨年整備が完成した高尾山口駅前の案内川が、今話題になっています。一年中登山客でにぎわう高尾山ですが、駅前に流れる「案内川」は、老朽化で護岸の劣化も著しく、令和元年東日本台風などの豪雨で崩壊するなど、整備の必要性が高まっていました。令和元年から護岸再整備に着手し、令和5年の完成とともに生まれ変わった案内川は、八王子市の公園と連携して一体整備した結果、みんなが集える憩いの場（高尾山ふもと公園）として高尾山の新たな観光スポットになりました。南西建が整備した大きな階段護岸は、「安全に川遊びができる人気スポット」としてメディアにも取り上げられていて「川底が舗装されていて深さは足首くらいまでなので安心して子供を遊ばせられます」というコメントなど嬉しい声が寄せられています。南西建が管轄する河川の多くは、自然豊かな場所に位置し、自然環境と両立する一体整備が求められます。複雑な工事設計や施工が求められる困難な現場も多いですが、工事現場にいながら自然に癒されることも多く、それだけにやりがいがあるのだとか。新緑の高尾山に訪れ、案内川のせせらぎの音を聴きながら、南多摩西部建設事務所の事業に想いを馳せてみてはいかがでしょうか。



次号のONE TEAM 建設局 特集について

NEXT

次月号は「あの人は今。」です。お楽しみに。